

字環字府

Interfaculty Initiative in
Information Studies
Graduate School of
Interdisciplinary
Information Studies
The University of Tokyo

number.

25

Gakkan Gakufu

Sapientia
Voluntatis
Virtus
Veritas
Clarietas
Diferentia
Concordia
Principium
Medius
Finis
Major
Aequal
Minor

Interview

GAKKAN GAKUFU

Interfaculty Initiative in Information Studies/Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

石田新学環長 インタビュー

成熟の十年に向けて

2000年に誕生した情報学環は今年2009年、10年目を迎えた。この4月より学環長に就任した石田英敬教授に現在の学環、これからの学環について語っていただいた。

● 情報学環が問われていること

ちょっと雄大な話になりますが、情報学環が発足した2000年は二千年記が終わって三千年記へと至る文明の大きなターニングポイントにありました。大学にとって、1900年代から2000年代というのは非常に大きな転換期であり、20世紀が終わるといふ文明の区切りあって学問は何をすべきかという大きなテーマが世界的にも共有されていました。学環ができてこの10年、必ずしも平坦な道のりではなく波乱もありました。みんな組織を運営していくことに精一杯で、始まりにはそうした大きな問いがあったことを少し忘れかけていたかもしれません。組織としての形がある程度安定してきた今、腰を落ち着けてもう一度始まりの問いに向き合い、テーマを深めていく時期に来ていると思います。十年の情報学環の歴史を捉え返して、次の十年、百年の計、そして千年の問い、つまり「情報文明」の問いへ向かっていく時に来ています。

昔は情報というと計算機などを扱っている一部の理科や工学の人たちの研究領域だと思われていましたが、1990年頃から現在私たちが日常的に使っているインターネット等のIT技術が人々の生活の中に広がり、情報の問題は誰にでも関係するジェネラルな問いとして扱うことが求められるようになりました。こうした課題に取り組む文理融合の組織として情報学環は立ちあげられました。そして、今や情報がどんな学問分野にも関係する問題であるという認識は当たり前になりましたが、今度はその問題をどう深めていますかと、その内実を問われ、具体的な成果が求められるようになりました。ユビキタスからヴァーチャルリアリティまで、情報デザインから教育環境の設計とメディア・リテラシーまで、あるいは、情報社会について社会科学的研究からメディア・アートまで、情報学環の研究と教育の展開は、情報文明の研究という課題に非常に具体的に取り組んでかなりの成果を上げてきたと自負しています。しかし、これからは情報学環という組織が独自に生み出した成果のうえに、学問的にも社会的にもかつてない斬新な貢献をしていかなければならないのだと思います。

● 学際情報学府のこれから

最初はコースがなかったのですが、今では5コースにまで拡充し、さまざまな教育を行うことができる条件が整ってきました。学生の数も増加しました。しかし何もなかったところに一つ一つ建て増しをするように作ってきたので、全部が立ち上がったときには、もう一度全体の見直しが必要になり、全体を整理、合理化、体系化し、充実させていこうということで、カリキュラムの拡充、再編や運営の合理化に取りかかりました。

学際情報学府の「学際」ということは若い学生にとってはとてもチャレンジであるのと同時に難しい問題を抱えています。19



photo by 望月孝

世紀の学問のようにそれなりの能力のある人が、こつこつと積み上げていけば立つことができたとする学問の最前線に、現在では、どの道をいけば到達することができるか明確ではありません。山々が重なっていて、最高峰の峰々は、その山の連なりのさらに向こうにあるからです。エベレスト登頂のようなのです。しかし、やはり基本的な学部レベルの教育はしっかりと受けて鍛えてこなければだめです。ですから情報学環はアンダーグラデュエイトの教育をしっかりと受けてきた人に、新しいテーマにチャレンジできる場所として私たちのような高度で学際的な大学院があるのだというメッセージをはっきりと打ち出せればと思っています。高い基礎的な能力をもつ学生が新しいチャレンジをおこなう場であってほしいのです。

もう一つ重要な問題として国際化があります。情報学環には昨年アジア情報社会コースができて国際的プログラムが立ち上がりましたが、外国の人がこちらに来るとのことだけではなく、日本の学生をグローバルに活躍できる人材に育てることが教育組織として取り組むべき課題であると思います。国際的な研究発信力をそれぞれの学生が切磋琢磨して獲得することができるような教育が実現できればいいと考えています。

● 社会に対する大学の役割

情報が希薄で欠乏していた時代、大学は様々な知識を蓄積して研究し、その成果を教える場所というだけで価値がありました。しかし誰もがインターネットで知識を手に入れることができるようになった今、大学の役割は氾濫する情報、過剰な知識の中からどれが本当の知識か、どれが真に確かな情報か、社会に対して知識や情報の質を保証することにあるのではないかと思います。前総長の小宮山先生が「知の構造化」ということを言って、知識の体系化・可視化に取り組みされましたが、さらにそれを進めて知の地図を示し、社会の不安定化に対して確かな知を担保する役割を大学は果たすべきです。濱田新総長の言う「知の公共性」という課題です。情報学環は、知と社会とのインターフェイスを大事にし、情報の問題を中心に扱っている部局なので、こうした課題に有効なノウハウを出すことはできません。「知識社会」や「情報社会」と呼ばれる現在の社会において、情報学環が果たすべき役割はとても重要で大きいのです。

2009年度、学府のカリキュラムはこう変わる

2009年度から、学際情報学府のカリキュラムにいくつかの改革が施されます。学環・学府も急速に規模が大きくなったので、それに合った中身を整備する必要性が出てきたという認識のもとづいて、柱を4つ立てました。

第1は、全体を見渡す場を作るということ。学期の始めに、できるだけ多くの先生に御登壇いただいて、学環・学府の輪郭を示していただく。試みに、「学環サムネイル講義」と名付けてみました。

第2の柱は、横系を通すということです。学際を志向している学環・学府ですが、専門性を身につけることも必要なので、コース制をとっています。それは良いのですが、コースが増えてくると、今度は横の風通しが悪くなってきた。そこで、「コース横断科目」を募集しました。今年度は3科目開講される予定です。

第3に、博士課程のカリキュラムの充実です。修士課程に比

べると博士課程は(良く言えば)放任主義だったのですが、もう少しキメ細かく面倒見る必要があるということで、英語を訓練する授業なども設けられています。

第4は、研究プロジェクトと教育カリキュラムの連動です。学環の先生方はいろいろなプロジェクトや寄附講座をお持ちですが、残念ながら、これらの研究活動と学府での教育活動が、必ずしもうまく連動していない面もあります。そこで、プロジェクトに参加することを教育カリキュラムにも反映できないかと検討中です。まだ検討段階ですが、最前線で研究に従事している特任スタッフのみなさんと、学府の学生たちの交流がもっと増えるとういと思っています。

教育はすぐには効果が出るものではありません。10年先、20年先を見越して進めていくことが大事だと思います。(教務委員長・佐倉統)

ユビキタス情報社会基盤研究センター 設立

2009年4月より、情報学環内の附属研究センターとして、「ユビキタス情報社会基盤研究センター」を設立しました。センター長には、坂村健教授が就任して、本センターをリードします。本センターの設立目的は、平成16年度から20年度まで5年間実施してきた、21世紀COEプログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」の研究成果を引き継ぎ、ユビキタスに関する世界最高の研究拠点の中核を担うことです。一方、教育分野の成果は、すでに総合分析情報学コースにおいて継承されており、この両者が密に連携することによって、21世紀COEの教育研究成果に基づいた拠点として機能します。本センターでは、ユビキタス情報技術を活用し、それを社会基盤化するために必要

な技術や社会制度などを包括的に研究し、それを実社会に適用することによって、国内だけでなく、世界で顕在化している様々な社会問題の解決に資していきたいと考えています。センターのメンバーは以下の通りです。(准教授・越塚登)

メンバー

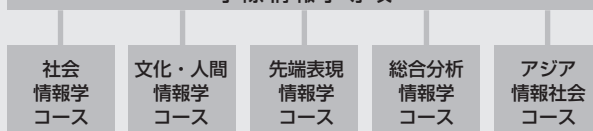
教授	坂村 健	センター長	准教授	石川 徹
教授	須藤 修		准教授	越塚 登
教授	暦本純一		准教授	田中秀幸
特任教授	石川雄章		准教授	中尾彰宏

先端表現情報学コースへの名称変更について

2009年4月1日、学際理数情報学コースは先端表現情報学コースと名称を変更しました。これは、より実質を表す名称に変更することによって、そのアイデンティティを明確にすべきであるという意図によります。新しい名称では、従来特徴的であった、メディア・アート・コンテンツ分野をより明示することに加え、「表現」という行為を必ずしも文字どおりの狭義ではなく、例えばロボットなどの行動体を一つのメディア(媒体)として捉え、あるべきコンテンツを根本的なところから提案することも狙いの一つであると示すことができたと思います。こうした

名称変更の真髄は、Emerging Design and Informatics Courseという本コースの英語名称に強く表されていると言えるでしょう。(先端表現情報学コース長・鈴木高宏)

学際情報学専攻



着任教員自己紹介



相澤清晴 (あいざわ きよはる) 教授

情報理工学系研究科電子情報学専攻から参りました。映像・マルチメディア情報処理に関する仕事をしてきました。情報学環との関わりは少し前からあり、コンテンツ創造科学人材養成プログラムや学部横断教育プログラム「メディアコンテンツ」にも微力ながら関わってきました。研究面では、ライフログ、3次元映像処理等に関心があります。前者に関しては、最近、画像処理を行う食事ログシステム(www.foodlog.jp)を作って実践体験中です。



Karlin, Jason Gregory 准教授

専門は文化史とジェンダー論ですが、特にメディアとポピュラーカルチャーが私の研究と授業において重要なテーマとなっています。現在執筆中の著書「流行の帝国」では、日本におけるナショナリズムとジェンダーの相互関係を、流行の変化から追究し、その分析を通じて、近代日本においていかなる国民文化が共有されるようになったのかを解明しています。アジア情報社会コースでは、皆様と協力して良いプログラムを築いていけたらと思っています。



園田茂人 (そのだ しげと) 教授

東京大学助手、中央大学教授、早稲田大学大学院教授などを経て、2009年より東洋文化研究所教授、情報学環流動教員。専門は比較社会学、現代中国研究、アジア文化変容論。主な編著書に、『証言・日中合弁』(1998年)、『中国人の心理と行動』(2001年)、『日本企業アジアへ』(2001年)、『東アジアの階層比較』(2005年)、『中国社会はどこへ行くか』(2008年)など。『不平等国家 中国』で第20回アジア太平洋賞特別賞(2008年度)を受賞した。



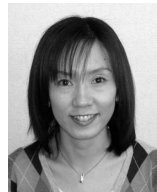
Smith, Roger Dale 准教授

I am an Associate Professor in the ITASIA Graduate Program, in which I teach courses on Asian history, politics and society (in conjunction with Professor Matsuda) as well as international relations theory using cases from the Asia-Pacific region. While my primary research focuses on Japanese foreign policy and law of the sea, I am also interested in interstate relations in Asia. I very much look forward to getting to know each of you better in the coming months.



辻井潤一 (つじい じゅんいち) 教授

私は、言葉の計算機処理の研究に40年近く従事していますが、言葉と意味、背後にある人間の知能という問題の難しさを実感しているところです。私は計算機科学から言語にアプローチしていますが、学環には全く違った立場で言葉を考えている方も多く、新たな刺激で展望が開けるのでは、と期待しています。英国マンチェスター大学も兼任していて、研究環境や文化、風土の変化を糧に新たな研究を構想したいと思っています。



堀 里子 (ほり さとこ) 准教授

はじめまして、薬学系研究科より参りました堀です。私の専門は「医薬品情報学」で、市販後の医薬品使用の安全確保を目指し、主に医薬品・健康食品情報の収集・解析・評価・提供システムの構築や、「医薬品適正使用」に必要な情報を非臨床・臨床試験に基づき創製する「育薬」研究を展開しています。情報学環では、他の分野とのインタラクションの中から、新たな研究にもチャレンジしていきたいと思っています。どうぞ宜しくお願いいたします。

原島博先生情報学環特別講演会 「人の環、学びの環、夢の環」



情報学環・学際情報学府の設立において多大な貢献をされ、第2代学環・学府長を務められた原島博先生が、2009年3月31日、定年を迎えられました。情報学環では3月11日、特別講演会と題し、貴重なお話を伺う機会を設けました。

本講演会は、「人の環、学びの環、夢の環」と、いかにも学環らしいタイトルをいただき、ご自身の生い立ちから学環の設立、またその先の展望に向けての、多岐に渡る貴重なお話をいただきました。聴衆およそ240名、会場となった情報学環・福武ホールB2F福武ラーニングシアターは満杯に埋まり、またその後の懇親会でも140名以上の参加があり、多くの方に慕われた原島先生の功績は疑う余地のないものと思われました。(前企画広報委員長・鈴木高宏)

3月14日



コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム
修了証書授与式

工学部2号館93B教室にて。
20年度修了生は22名。

3月18日



情報学環
教育部修了式

情報学環本館2階教室にて。20年度修了者は22名。

3月23日



学際情報学府
学位記授与式

福武ラーニングシアターにて。修士課程修了者71名、博士課程修了者13名。

修了式



優秀修士論文発表会開催

2月20日、優秀修士論文には選ばれた下記8名による発表会が福武ラーニングシアターで開催された。最優秀賞には鈴木莉紗さんが選ばれ、表彰された。

大蔵 苑子 (理数):

光源環境と対象物の同時撮影法に基づく人物モデルのMRへの組み込み～飛鳥京コンテンツへの応用～

久保 綾 (社情):

情報化による家庭/職場の領域の曖昧化と家族間コミュニケーションに関する研究

門脇 明日香 (理数):

触覚センサ埋込柔軟外装による密着センシングに関する研究

大井 奈美 (文人):

俳句創作と解釈の基礎情報学的分析

渡邊 徹志 (分析):

都市環境記述を考慮したアクティブREIDによる場所特定手法

鈴木 碧 (社情):

動機を語る動機 -AV女優の業務と「自由意志」の成立過程-

平戸 淳正 (理数):

半受動遊泳型刺胞動物の形状・運動シミュレーション

鈴木 莉紗 (文人):

展示空間に生まれる偶然性に着目したアート表現 -シャボン玉が人と空間をつなぐ-



メディア研究のついで 「つながるジャーナリズムの必要」

「メディア研究のついで」(林香里研究室主宰、電通コミュニケーションダイナミクス寄付講座)が1月21日、情報

学環本館で開かれ、河北新報社生活文化部長の寺島英弥さんが「つながるジャーナリズムの必要」と題し、講演した。

寺島氏は2002年に渡米し、地方紙とコミュニティの関係を改革する運動「シビック(パブリック)・ジャーナリズム」にかかわった新聞記者や研究者を取材した経験から、読者と記者という対立関係ではない新しいジャーナリズムについて「つながるジャーナリズム」と表現し、その実践と可能性について語った。新聞記者として自らの経験も交えながらの講演は、会場が満員になるほどの好評を博した。(林研D2・福博究)

河口ワールド@湯島聖堂



1月23日から2月8日まで、湯島聖堂で「表現科学 知のサバイバル展」を河口先生指揮の下、開催した。東大の前身である伝統的史跡、昌平坂学問所を河口先生のアートで埋め尽くして生まれる摩訶不思議な世界に、身内でありながらも感嘆した。あまりの忙しさに記憶も曖昧であるが、小宮山(前)総長に始まり、吉見(前)学環長、石田学環長はじめ、学環からも沢山の方にご来場頂いた。河口研の血と汗と涙の結晶、お楽しみ頂けたのならば幸いです。ご来場下さった皆様、そして想像を絶する重荷を見事背負いきった河口研の運営スタッフ、惜しみなく協力下さった方々に心からお礼を申し上げます。(助教・米倉将吾)

岩波映画寄贈を受けて シンポジウム開催

戦後日本を代表する記録映画会社「岩波映画製作所」のフィルムが、日立

製作所等から東京大学に寄贈された。これを受けて、シンポジウム「岩波映画の1億フレーム」が2月14日、福武ホールで開催された。

シンポは2部で構成。第1部「岩波映画の可能性を見る」、第2部「開かれたアーカイブに向けて」と題し、岩波映画の保存や活用、開かれた映像アーカイブを実現する課題などについて熱心に話し合われた。

情報学環では「記録映画アーカイブ・プロジェクト」(<http://www.kiroku-eiga-archive.com/index.html>) を立ち上げ、今後も記録映像の保存と活用に取り組んでいきます。(准教授・丹羽美之)

続報「建築の際」

建築系連続トークイベント「建築の際」全5回のうち、第3回が2月19日、第4回が3月10日、第5回が3月24日に福武ラーニングシアターで開催された。本企画は、学際情報学府と工学系研究科の大学院生が、建築家×他ジャンルの専門家×情報学環教員のゲストの選定から、事前取材、プログラム作成、当日の司会、建築雑誌におけるレポート執筆に至るまでのすべてを務めるボトムアップ型の企画である。

第3回「形式の際」は、建築家の青木淳氏、音楽家の菊地成孔氏、岡田猛教授、第4回「振舞の際」は、建築家の山本理顕氏、劇作家の野田秀樹氏、山内祐平准教授、第5回「空間の際」は、建築家の原広司氏、数学者の松本幸夫氏、暦本純一教授をお招きして刺激的な「対話」がなされ、大盛況のうちに幕を閉じた。(助教・南後由和)

シンポジウム 「コンテンツ教育の未来へ - The Content Education: Bridging to the Future-」開催

2月24日、情報学環・福武ホールにおいて、シンポジウム「コンテンツ教育の未来へ」が開催された。本シンポジ

ウムは、「コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム」が、今春終了するのをうけ、コンテンツ教育の未来像を改めて議論する趣旨で開催された。学環からは原島博教授、水越伸准教授、学外からは、角川彦彦氏(角川グループホールディングス)、ミシェル・マカウ氏(カーネギーメロン大学)、金相顯氏(韓国文化コンテンツ振興院)、野澤泰志氏(経済産業省)などを迎え、各方面から興味深い発表がなされた。200名を超える来場者が各講演に熱心に耳を傾け、コンテンツ教育に関する関心の高さを改めて認識させられる機会となった。(特任助教・研谷紀夫)



受賞報告

●1-ClickAward 審査員特別賞

佐々木遊太(教育部研究生)が、1-ClickAward(株式会社リクルートメディアコミュニケーションズ、ガーディアンガーデン主催)のインタラクティブ部門において中村洋基賞(審査員特別賞)を作品「牛舎」で受賞。<http://www.1-click.jp/>をどうぞご覧ください。

●ニュークリエイターズコンペティション09入選

阿部卓也(石田研・博士課程)、甲元賢治(石田研・修士課程)が製作したメディアアート「Did You Remember What You Are Going to Do Tomorrow?」が、静岡市クリエイター支援センター主催のニュークリエイターズコンペティション09に入選。同センターにて1月16日から2月14日まで展示を行った。

人事異動

教員	採用	4/1	堀 里子 准教授 (大学院薬学系研究科から)	
	昇任	4/1	石崎雅人 教授	
	再配置(転入)	10/1	Karlin Jason Gregory 准教授 (社会科学研究所から) Roger Dale Smith 准教授 (東洋文化研究所から)	
		4/1	相澤清晴 教授 (大学院情報理工学系研究科から) 園田茂人 教授 (東洋文化研究所から) 辻井潤一 教授 (大学院情報理工学系研究科から)	
	定年退職	3/31	原島 博 教授	
	辞職	3/31	澤田康文 教授 (大学院薬学系研究科へ) 荒木淳子 助教 (一橋大学へ)	
	任期満了	3/31	樺島榮一郎 助教	
	職員	再配置(転入)	10/1	延原和志 学務係長 (柏地区新領域担当課教務係主任から) 岩沢秀明 研究協力係長 (国立歴史民俗博物館管理研究協力課教育係主任から) 鈴木和美 副事務長・総務担当 (柏地区物性研究担当課副課長から) 山下信一 副事務長・会計担当 (大学院経済学系研究科副事務長から)
		配置換(転出)	4/1	種市政弘 (大学院工学系研究科学務グループ専攻チーム係長へ)
		昇任	4/1	小暮弥生 学務係主任
辞職		10/15	小竹正広 主査	
定年退職		3/31	三浦孝樹 専門員 北田義保 主査	

Book



『続 基礎情報学』

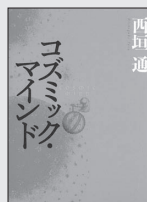
西垣通著 / NT T出版 2008年12月

細胞や心や社会等に関する諸情報現象を統一的なシステム・モデルでとらえる基礎情報学のテキスト第2弾。個人や組織の知識形成プロセスを論じ、人間を機械的要素に還元しないための新しいコンピュータ観をしめす。

『ゴズミック・マインド』

西垣通著 / 岩波書店 2009年2月

銀行統合にともなうオンライン・システム構築をめぐる、完全犯罪にエンジニアの執念が迫る。はたして神のような絶対知はありうるのか? ——コンピュータ宇宙の根底を情報学的に問ひかける思想小説。



address: 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

e-mail: news@iii.u-tokyo.ac.jp

the member
of editorial
board: 柳原 大・林 香里・前波奈保子・福 博充

editor's note:

東大広しと言えども部局長秘書が広報誌作りに携わっている例は珍しいのではないかと思います。私はかなりの愛情を持ってこの編集に関わっています。その楽しみの一つが表紙作り。今年度は今までになかったビビッドな色で勝負します。今号の濃ピンクを通して見えるのは、新学環長の石田先生の研究にちなんだ〈知恵の樹〉。そのむかしの13世紀、たくさんの文化と宗教が入り交じるマジョルカ島に生まれたルルスという修道士が「完全で普遍的なことば」を作ろうと企て、その体系を図で表したのが〈知恵の樹〉なのだとか。これは現代のコンピューターが目指すものにも通じているそうです。まさに情報学環らしい素材ではないでしょうか。(な)

Interfaculty Initiative in Information Studies
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies
The University of Tokyo

<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/>

.25

05. 2009